

国際大学大学院日本語プログラム機関報告 (1998-1999)

<http://www.iuj.ac.jp/jlp/index.html>

田丸淑子(tamaru@iuj.ac.jp)

加藤陽子(kato@iuj.ac.jp)

1. 機関概要

国際大学は、国際社会で活躍する人材の育成を主目的として、経済界の支援の下に1982年に設立された大学院大学であり、大学院国際関係研究科と、大学院国際経営研究科(MBA)の二つの研究科がある。新学年開始は9月末であり、各学期10週間の三学期制をとっている。日本語以外の授業は全て英語で行われている。在學生は約200名で、そのうち70%近くが留學生であり、出身国は30ヶ国以上に及んでいる。日本語は単位のつく選択科目である。

2. コースと授業時間数

日本語のクラスは1(初級)から10(上級)まであり、次のように提供されている。

1年目			2年目			対象とする学生
秋学期	冬学期	春学期	秋学期	冬学期	春学期	
1	2	3	5	6	7	・ゼロから始める学生用
2	3	4				・ゼロ+程度の学生用
5	6	7	8	9	10	・中級前半修了程度の学生用
	8	9				10

	授業時間数	単位
日本語1～6	1日90分X週5日	1
日本語7	1日90分X週4日+テュートリアル(小グループで90分/週)	1
日本語8～10	1日90分X週3日+テュートリアル(目安:一人30分/週)	1

本大学は、前述したように英語で授業が行なわれているので、日本語ができなくても入学できる。従って、日本語を履修する学生は全くの0レベルが大半ではあるが、日本語をある程度勉強して入学する学生も年々増えてきたこと、また、2年後の卒業時に少しでもレベルの高い学生を送り出したいという希望もあり、日本語2から始め、2年間で日本語7まで、あるいは、日本語5から始め日本語10まで進むコースを主コースとした。よって、日本語1から始めた学生は夏休みに自分で何らかの方法で学習し、1学期飛んで、秋学期に日本語5に進まなければならないことになる。

学生数はすべてのコース合わせて約80名で、専任4名、非常勤3名で担当している。

3. 使用教材

<日本語1～3>

“Japanese For IUJ Students”(試用版 第3版)

国際大学日本語プログラム作成

<日本語2～4>

“Japanese For IUJ Students”(試用版 第3版)(第10課より) 同上

「日本語でビジネス会話」、読み物生教材(日本語4)

日米会話学院

<日本語1～4までの漢字教材>

“Basic Kanji Book” Vol.1,2 (35課まで 約400字)

凡人社

<日本語5～7>

「日本語でビジネス会話」(日本語5～6)

読み物教材(中級教材からの抜粋、新聞記事等、テーマは生活、政治、社会の領域)

“Basic Kanji Book” Vol.2 及び “Intermediate Kanji Book” 凡人社

4. 問題点

- 1 前述の通り日本語以外は全て英語で授業が行なわれる、留学生の方が日本人学生より多い、学生はほとんど学生寮に住んでいる、町の人と接する機会が少ない、また、大学内で使われる言葉は英語、ということで、日本国内でありながら、外国にいる環境のようなものであり、日本語クラス以外は日本語を話すチャンスがないというのが学生の問題点である。学生の動機づけや、進歩の自覚の上で、大きなハンディとなっている。
- 2 学生は2年間で専門科目（国際関係修士またはMBA）の課程を勉強しながら日本語も履修するので、日本語学習に十分な時間を割くことができない。
- 3 教員数の制約から、各学期に提供できるレベルは最大4レベルである。また、学習期間が2年と短いため、その学期に提供されないレベルの学生もなんとか拾っていかこうとするので、クラス内での学生の能力差が深刻な問題になる。（チュートリアルやオフィスアワー等で対処している）
- 4 国際経営研究科では、2年生の秋学期と冬学期に大半の学生が外国へ交換留学に行ってしまう。よって、1年間日本語を勉強しても、交換留学へ行った場合は1学期抜けることになり、交換留学から帰ってきてても日本語のクラスに戻ってこられない学生が多い。従って、2年間続けて日本語を勉強する国際経営研究科の学生が少ない。
- 5 本大学の学生は卒業後、銀行や証券会社、コンサルティング会社などのビジネスにつく学生が多く、そのため2年間で効率よく話す・聞くの力がつくことを学生は望んでいる。従って、日本語プログラムでは話す・聞くに主眼を置いて、日本語4（ここから中級としている）から、「日本語でビジネス会話」を使っているが、これだけではどうしても文型が弱く、上に伸ばす力をつけるため読み教材も併用しているが、中級（日本語4～7）を通して使える適当な読み教材がないのが目下の悩みである。
- 6 初級・中級で「話す・聞く」を重視するため、漢語語彙・表現が不足して大学院生（プロフェッショナルの予備軍）として理解・表現したいことがあってもそれができないという焦燥感が強い。日本語7～8にかけて、語彙増強を重視する方向を打ち出し、やや改善された。しかし、初級での日常会話重視と、中・上級での専門分野を意識した読解・スピーチとを、どのように橋渡しさせるか。全レベルにわたる統合的な達成目標とその実現化の方策という大問題に直面している。

5. 参考：各コースの内容及び到達目標

	内容及び到達目標
日本語1	あいさつ、買い物、簡単な自己紹介等、限られた場面でのやりとり。基本的な動詞、名詞、形容詞の使い方及び月日、時間、曜日表現などを習得。平仮名、片仮名、漢字約80字の読み書き。
日本語2～3	一般的な話題についての描写及び現実に目の前で起こっていないこと、理由、希望等が表現できる。漢字約320字程度の読み書きができ、辞書の助けがあれば、3～4段落の簡単な読み物が読める。辞書をひいて、漢字の読み方、言葉の意味を調べることができる。
日本語4	依頼する、約束する等のある特定の状況に置かれた時、困らない程度の会話ができる。敬語を使う場面にも対応できるようになり始める。また自分の意見も言えるようになり始める。漢字約450字程度の読みができる。
日本語5	改まった場面で敬語を使って話せるようになる。必要な語彙さえあれば、政治、経済などやや抽象的な話題でも、ごく一般的なことなら話せる。漢字約600字程度の意味がわかり、読める。
日本語6～7	様々な場面で適切な待遇表現を正確に使いこなし、会話の目的を効果的に果たすことができる。1ページ程度の読み物を読んで、その内容について話し合い、意見を交換することができる。プロジェクトの実施と発表。簡単な面接。漢字約750字+程度の意味が分かり、読める。
日本語8～10	国際関係・国際経営に関する分野で、新聞、雑誌、テレビ、ラジオ、インターネット上での情報を自分の力で収集し、それに基づいて発表や討論をおこなうことができる。（ただし、専門書の購読、論文の作成には更なる指導・訓練が必要。）場・内容にあった表現の選択ができる。この段階のまとめとして、プロジェクトを実施する。OPI上級上の会話力をつける。